

## 第2回看護研究会

(看護補助者教育研修会)

- 日時 平成28年8月6日(土) 10時～16時05分
- 会場 岡山口イナルホテル
- 出席者 87病院210名・委員6名

看護補助者を対象に、午前中は倫理についての講演と演習、午後は認知症ケアについて講演があった。

### 講演

#### 尊厳を支えるケアを目指して



講師  
川崎医療短期大学  
医療介護福祉科  
山田 順子 教授

人と人の関わりにおいて守らなければならない価値や規範が倫理である。

倫理には自律尊重原則、善行原則、無危害原則、公正原則の4つの原則がある。他人の自己決定を尊重し支援する自律尊重原則、利用者の利益・幸福のために善を促進する善行原則、利用者がこうむる被害を最小限にする無危害原則、人々を公正・平等に扱う公平原則である。これら4原則は状況によって対立することもあり、状況により優先順位が異なる。

対人援助の専門職にはものの見方、考え方において専門職性を問われる。従事する仕事の意味、その価値について

明確な考え方を持つことが求められる。専門職として働く上で、職業倫理を持つことが大切である。

人間は誰もが尊厳を有し、その尊厳は不可侵である。尊厳を支えるということは、人に対する姿勢・まなざしであり、相手に対してどのように関わるか、関わり方そのものである。他者を理解しようとするとき、自己の価値観、感情などが働き、ありのままの他者を理解する妨げになることがある。援助関係を適切に維持するには、援助者自身の傾向性を熟知し、価値偏見や先入観などでことを運ばないように意識的に行動する必要がある。職場や利用者、患者との関係の中でも価値観を認め合えること、いろいろある考え方をすり合わせていくことが重要だ。

事例をもとにグループで検討した。謝礼を渡そうとする利用者の事例では、気持ちを受け取り、謝礼は受け取らないで行為そのものは否定しない。同僚の悪口を言う利用者では、「誰が」ではなく「何が」に注目して聞く。利用者がどうしてほしいか、「何」を聞くかが大切である。みんなで考え、決めつけない柔軟い発想力が必要である。

関係性において過不足のない「いい加減」が大切だ。加減具合は人と人との関わりの中で常に検討され、更新されなければならない。そこにいるだけで100点といえる、認め合える関係性が尊厳を支えるケアにつながる。

(看護研究委員 高村洋子)

### 講演

#### 認知症のかたと向き合うには



講師  
川崎医科大学  
神経内科学教室  
久徳 弓子 講師

認知症高齢者の現状として65歳以上の高齢者人口3079万人のうち4分の1にあたる462万人が認知症有病者となっている。そのため認知症を早期に発見して早期に対応することがとても重要となる。

認知症にはアルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症、血管性認知症などいろいろな種類がある。

認知症の中核症状として記憶障害、失語・失行、失認・遂行機能障害、人格変化・病識の欠如などがある。

認知症の診断をつけるためには問診・診察をていねいに行い、本人と家族からこれまでの経過を聞き取っていく。また、神経心理検査、画像検査、血液検査、心電図検査を行い裏付けていく。

認知症の治療は病気の進行を遅らせ、本人が少しでも長くその人らしく暮らせるように支えること、そして家族の介護の負担を軽減することが治療の中心となる。

認知症治療薬には神経伝達物質が減るのを抑さえ、情報の伝達をスムーズにするコリンエステラーゼ阻害薬と過剰なカルシウムイオンの流入をブロックし、

記憶の情報伝達を整え神経細胞を守るNMDA受容体拮抗薬がある。薬以外の治療については聞き取りやドリル、昔の出来事を思い出すこと、家族以外の人たちと交流すること、音楽・絵画・陶芸などを楽しむこと、囲碁・将棋・麻雀などを楽しむこと、ウォーキングなど軽い運動を続けること、ペットを飼うことなど脳の活性化につながることを行う。

認知症をまねく危険因子には遺伝的な要因、老化などの変えられないものと過食・偏食、生活習慣病、喫煙、飲酒、運動不足、趣味が少ない、対人関係が少くないなど変えられるものがある。

- ① 健康診断の結果を「放っておかない」
  - ② メタボリックシンドロームを予防する
  - ③ よく歩く習慣をつける
  - ④ 転ばないように筋力をつける
  - ⑤ 歩きやすく転びにくい靴を選ぶ
  - ⑥ 頭をぶつけない
  - ⑦ 自分の歯と健康な歯ぐきを残す
  - ⑧ かかりつけ医をもつ
- 認知症のかたへの対応として「言葉で説得、励まし、批判をするのではなく、優しい気持ちで接する」「知性ではなく、感性に語りかける」「真正面からはつきりとした声でゆつくり短く話しかける」「適切な介護があつて、はじめて薬物の効果が発揮されることを理解する」これらのことが大切である。

(看護研究委員 池田悦子)